

ティーチングポートフォリオ

京都ノートルダム女子大学
現代人間学部 こども教育学科
神月紀輔

目 次

1	教育の責任	3
2	教育の理念	3
3	教育の方法	4
4	授業の評価	5
5	地域における教育活動	5
6	学習の成果	5
7	教育の改善	6
8	今後の目標	6
9	資料	

1 教育の責任

神戸市の中学校教諭を退職し、滋賀大学大学院教育学研究科を経て、京都教育大学において「教職実践演習」の非常勤講師、また大阪学院大学において「情報基礎」(演習)を非常勤講師として担当し始めてから、大学教員生活は17年間に及ぶ。現在本学の現代人間学部こども教育学科に所属し、主に小学校教員の養成に携わっている

現在は、こども教育学科の科目として、「情報教育」「教育の方法と技術」「算数」「算数科指導法」「こども教育演習」「こども情報リテラシー」を単独で開講しており、「こども教育基礎演習」「こども教育フィールド研修」「教育実習事前事後指導」「初等教育実習Ⅰa」「初等教育実習Ⅰb」「初等教育実習Ⅱa」「初等教育実習Ⅱb」「教職実践演習」「子供のネット安全教育の理論と実践」は学科でのオムニパスまたは共同開講科目である。また学科共通科目として「情報科学B」を単独で、共通教育である「ノートルダム学」をオムニパスでそれぞれ担当している。なお、学科学部の科目は、平成29年度の大学設置審議会で、教職に関する科目は平成30年度の教職課程設置認可でそれぞれ認可を得ている。「子供のネット安全教育の理論と実践」については、京都の大学共同施設であるコンソーシアム京都に提供しており、広く京都の学生にも開講している。

専門分野が情報教育・算数教育であるため、女子大である本学の学生にはなじみが薄い分野であるので、専門分野の用語をより基本的な概念から捉え直すようにし、このことで小学校教員となった場合に基本的な視点から捉える考え方を身に付けさせようとしている

2020年度の担当科目

こども教育学科専門科目

単独：教育の方法と技術，情報教育，算数，算数科指導法，こども情報リテラシー，こども教育演習，卒業論文

共同：こども教育基礎演習，こども教育フィールド研修，教育実践演習（幼・小），教育実習事前事後指導，初等教育実習Ⅰa，初等教育実習Ⅰb，初等教育実習Ⅱa，初等教育実習Ⅱb

現代人間学部共通科目

単独：情報科学B

共通教育科目

共同：ノートルダム学

大学コンソーシアム京都提供科目

共同：子供のネット安全教育の理論と実践

2 教育の理念

学びの主体は学生であり、教え込むことをできるだけ避けようとしている。学生自身が考

え、自分のものとするために、学生にとっては冷たいと思われる節もあるが、答えを先に出さず、時間をかけることを考えている。

基本的に、心理学の学習の理念を底辺に考えている。それは「学習とは、多少とも持続的な変容を示すこと」であり、スキナーに代表されるプログラム学習や、ソーンダイクに代表される試行錯誤学習、ガーゲンの提唱する社会構成的学習理論などを、教材によって組み合わせるようにしている。

そのため、学生と向き合う時間を大切にし、また、授業時間以外に起こる学びも重要な学びととらえ、様々な場面で学生との「対話」を重視した教育を展開したいと考えている。

授業のみでなく、課外の活動や、食堂などで出会ったときの些細な会話も、学びにつながり、なにかの動機づけになる可能性があると考え、大切にするようにしている。

3 教育の方法

前述のことから、ICT 機器の活用や、教材の作成を行っている。

1) 授業では

- 1 授業計画を毎回提示し、今どこでこれからどうするのかゴールはどこかを明示するようにしている。
- 2 授業中はあまり規律に制限をかけず、隣と話すことなどにより学習をより深いものになるようにし、知識の共有が行われやすくしている。もちろん私語などは注意し、その授業に会ったコミュニケーションが円滑に行われるようにする。
- 3 様々な学びをとらえるために、以前はメールで、最近は **respon** (株式会社朝日ネット) や **Forms** (Microsoft) を活用し、意見やコメントを収集し学生の学びを多角的にとらえる工夫をしている。またここででた質問には毎回授業内で必ず答えるようにしている。
- 4 授業中は講義形式では、プレゼンテーションソフトのスライドを投影し、講義を進めるようにしている。このスライドは、本学の基幹 **LMS (Learning Management System)** である **manaba** コース (株式会社朝日ネット) にスライドコピーを PDF でアップロードし、学生がスマートフォンや PC などいつでもどこでもアクセスできるようにしている。そのため、授業中は、PC、タブレット、スマートフォンの使用を推奨している。
- 5 教材によっては、黒板等の使用も考えている。
- 6 できるだけ、学生自身で考えるように、グループ活動を取り入れている。グループ編成も学生の自主性に任せ、責任を持ったグループ活動にしようとしている。
- 7 学習の成果は必ず自己評価を求めている。こちらの望む学習ができたかどうかではなく、自分にとってその学習がどうだったのかを考える時間を取るようにしている。

2) ブレンディッドラーニングの試行

コロナ禍において、オンライン授業のニーズが高まり、2020年度前期はオンラインによる学習を行ったが、実際には、オンラインと対面を組み合わせるブレンド型が効果的と考える(神月・宮田, 2008)。これまでも行ってきたが、講義をなるべく動画による配信にし、対面時は、質問に対する応答や学生間の相互作用を促す取り組みなどにあてて行っている。特に2020年度後期はその取り組みを3科目(教育の方法と技術, 算数, 情報科学B)において行っている。

3) 普段から

常に話しやすい雰囲気を作るようにし、間違っただ意見でも言いやすいようにすることを心掛けている。人数の多くない大学である利点を生かし、様々な学生に声をかけていくことを考えている。

4 授業の評価

授業評価アンケートでは、半数以上の学生にはよくわかったや理解できたとの評価であるが、内容が難しい部分があるので、その点でわからなかったという評価がある。

また、主体性を重んじた授業展開のため、これまで、すべきことを指示されてくるが多かった学生にとっては、「冷たい」「教えてくれない」というイメージを持たれることもある。

5 地域における教育活動

学校教員養成という性格上、教員に対する指導や研究授業への指導助言活動が年間に10本程度ある。また情報教育という専門性のため、特に情報モラル啓発に関わる、幼小中高校への出前授業・保護者向け講演・教員研修の活動が例年は多い。本年度はコロナ禍による影響でその数は激減しているが、例年であれば、25本から30本程度行っている。

前述の「子供のネット安全教育の理論と実践」は京都府府民環境部消費生活安全センターの協力により、京都府内の児童館での学童保育等でインターネットの安全に関する啓発活動を指導した学生が行っている。

同様の情報モラル啓発ではあるが、地域の人権学習による取り組みとして行われることもあり、インターネット上の人権意識の向上に向けた取り組みを行っている。

亀岡市では、いじめ調査委員を委嘱されており、市内のいじめの撲滅に力を入れている。

6 学習の成果

学習の成果として、最も顕著と感じているのは、卒業生が幼稚園・小学校・特別支援学校の教育現場に立ち、活躍をしていることである。教員養成の学科に奉職するものとして、まずこの部分は成果としてあげたい。こども教育演習という授業では3~10人のゼミ生を受け入れてきているが、その半数以上が教育現場に立っており、それ以外の学生も、ここで学んだことを礎として、子供関連の仕事に就く場合が多い。

1つ1つの授業に関しては、毎回コメントに対するフィードバックを欠かしていないことで、大学での学びを身近に感じてもらい、意欲を持って取り組めるようにしているが、そのかいあってか、毎回のコメントの量は授業が進むにつれて多くなり、自分の考えを外化したり相互評価したりできるようになっている。このことも成果としてあげておきたい。

さらに、研究室への学生の訪問が多いこともあげておきたい。すべてが授業に関連することではないが、授業での取り組みが質問や相談をしようという動機づけにつながっていると考える。これらのことは今後も続けていきたいと考えている。

7 教育の改善

20年近く前に、コメントをメール等で取り入れるシステムを始めてから、自らの授業は大きく変わったと考えている。それまでの知識注入型から、学生と問題を解決する形に変え、毎回のコメントにより学びに変化が見えることで読むことが楽しみになってきている。携帯電話が主流であった当時に比べ、スマートフォンが主流である現在は、処理も早くなり、スライドや資料のビジュアルも見た目によくなりわかりやすくなり、それを学びにプラスするために変革を加える必要がある。

また、このような機器は変化の速度が速いために、学生のスタンダードを察知し、わざわざPCを扱うのではなく、日頃の機器の使用の延長線上で、学びのための機器を使用できるよう工夫が必要である。

さらに、その時間だけの学びではなく、隙間時間に注目し、隙間時間で学びを可視化し、また本人が意識することに気づかされてきた。すなわち、様々な場面において、教材を準備できれば、これまで以上に学びは深化する可能性もあり、そのような観点で、さらなる教材の改善にも取り組む必要がある。

8 今後の目標

大学において、主体的に学べる学生を育成することが大きな目標である。そのことは教員養成の立場においては、将来教員となる学生が自ら主体的に学ぶことにより、次の世代へ主体的な学びを継承することとなり、アクティブラーニングの実践につなげることができるからである。そのための具体策としては、教育方法のさらなる修得、情報機器の効

果的な活用法の修得などがあげられる。

また、研究分野である情報モラルの育成も教育として扱い、ネットでもリアルでも人の心や人の気持ちに寄り添うことのできる学生を育てることで、ネット上の誹謗中傷や知的財産権の侵害などに留意し、情報を見通す力を育成することにつなげることができると考える。そのため、ND 教育センターを中心とした情報活用力プログラムに積極的に参画し、学生の力を上げていきたいと考える。

ここで得た知見は、これまで通り小中高等学校や地域の後援会・出前授業・保護者会などで発信していく。

9 資料

神月 紀輔, 宮田 仁, (2008) 教員志望者を対象としたインストラクショナル・デザインを学ぶためのブレンディッド型 e-Learning の実践, 日本教育工学会論文誌, 2008, 32 巻, Suppl. 号, p. 153-156,